

## 【巻頭言】学問と責任

著者	神野 直彦
雑誌名	日本社会事業大学研究紀要
巻	67
ページ	1 - 2
発行年	2021-03
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1137/00000520/">http://id.nii.ac.jp/1137/00000520/</a>

# 巻 頭 言

日本社会事業大学学長  
神 野 直 彦

## 学問と責任

真理を探究する学問を、人間は何故に学ぼうとするのかといえば、それは人間が必ず死ぬということを自覚しているからだといってよい。死が学問を学ぶことを基礎づけているといえ、**「最後のローマ人にして最初のスコラ学者」**と讃えられるボエティウス（Anicius Severinus Boethius）を想起されるかもしれない。ボエティウスは反逆罪に問われ、刑死を待つ獄中で中世のベストセラーとなる『哲学の慰め』を著している。

この『哲学の慰め』を初めとするボエティウスの著作は、中世の学問観というべき自由七科に結実していくことになる。しかし、私が注目したいのは、ボエティウスが刑死を覚悟しながらも、生きている状況を理解し、それを自由に選ぶことができると説いていることである。

死を覚悟してもなお、というよりも死を覚悟するが故に、人間は学問を学ぼうとするのだということを、私は日本社会事業大学の学長在任中に学生から学ぶことになる。その学生は堤康代さんという。私はその時の「学び」の体験を、堤さんの許しを得て『スローライフ瓦版』（第441号、2018年11月27日）のコラムにエッセイとして掲載している。

『スローライフ瓦版』とはスローライフ学会が週刊で出している機関誌である。私は今は亡きジャーナリスト筑紫哲也に頼まれてスローライフ学会の学長を務めている。そのため私は、『スローライフ瓦版』の「学会コラム」を輪番で担当している。今からすれば、2年以上も前の昔話となるけれども、堤さんからの「学び」を、この「学会コラム」で、「生きること」は「学ぶこと」というタイトルのもとに取り上げたのである。

その時の私のエッセイを敢えて掲載すると、次の如くである。

### ..... 「生きること」は「学ぶこと」

人間は葦のような弱い存在ではあるけれども、次の瞬間には違った存在になろうとして生きている。だからこそ人間は自分が存在した証として学ぼうとする。

私は現在、日本社会事業大学の学長を務めている。学長なので講義を担当することはないが、学生から学長の講義を聞きたいという声があがったので、希望する学生に「学長特別講義」をしている。

単位にもならない講義なので、受講する学生の眼の輝きには感動する。一人ひとり自己紹介をさせると、秋の日差しを浴びながら、「私はシングル・マザーで子供が二人います」と述べ、陰りのない美しい笑顔を浮かべた学生がいた。その学生は堤康代さんといい、私の人生の終わりに出会った心から尊敬する人である。

私が堤さんに、お子さんを誰に預けているのかと尋ねると、「長男は就職をしているし、次男は大学に入学したので、自分は仕事を辞めて、大学に入学した」との予想だになかった答えが返ってきたので、私は狼狽した。私は堤さんを若く見誤っていたのである。

個人的に話を聞けば、堤さんは仕事をしている時に貯めたわずかばかりの貯蓄を取り崩して、学費と生活費にあてているという。それでも「貧しくとも、生きてはいけますよ」と堤さんは、さびしげに微笑した。続いて口を衝いて出た言葉に、私の胸は張り裂けた。それは「私は長くは生きられないのです」という言葉である。

堤さんは二度も脳梗塞に襲われていた。半身は未だしびれているという。医者からは大学に入学することを止められたにもかかわらず、堤さんが最悪事態を覚悟して選択した「生きる」道は、大学で「学ぶ」ということだったのである。

「ミダスの呪い」に取りつかれた大学の財務責任者は、堤さんの学費の一部を支援する奨学金を、一度は支給すると発表しながら、ただ「金がない」との理由で支給を取り消した。堤さんは私に、「自分の命はもう長くないので、私にはお金はいいのです。でも若い人たちにはどうかしてあげて」と願いを告げた。私は彼女の天使の心に涙した。

私は奨学金を取り消された堤さんを含む7名の学生すべての奨学金を、大学に「貧者の一灯」として寄付することで復活させることにした。そうしなければ、「あなたの命は見捨て

ない」と叫びつづけ、日本社会事業大学を巣立った卒業生に申し訳が立たないからである。というよりも、私の尊敬する堤康代さんに合わせる顔がないからである。

真理を探究する学問を学ぶことは、自己の存在している状況を理解するためであり、それは「いかに生きるべきか」を省察するためである。しかし、人間は死を覚悟した限界状況においてもなお、人間は「いかに生きるべきか」を追求する。それは人間が必ず死ぬことを自覚しているからであり、人生はたった一度しかないことを知っているからだといってよい。それを堤さんは自己の「生」を賭けて、私に学ばせようとしたのである。

しかも、堤さんは死の瞬間においてさえ、なお人間は自由な存在だと教えてくれている。つまり、死の瞬間においても、人間は真に価値あるものを選択できる。死を見つめる限界状況のもとでは、「お金」などの経済的富には価値はない。もちろん、富だけに限らず名声も権力も、人間の創り出したフィクションにすぎないものには価値はない。堤さんは限界状況にあるからこそ、「生きる意味」を追求する学問を、学ぶことに真の価値を見出したのである。

人間は一度限りの人生の旅路を歩いていく。人生が一度限りだということは、人間が一瞬一瞬にしか存在しないことを意味している。それは常に死と向き合う瞬間を繰り返しながら、人間は生きていることを意味している。

人間がたった一度の人生を、瞬間瞬間に存在するものとして生きていくということは、人間の存在の唯一性を物語っている。つまり、人間は他に同じ存在のない、掛け替えのない、唯一の存在として生きている。

人間は掛け替えのない存在として、たった一度の人生を生きるということは、人間は生きるということに重い責任を負っていることを意味している。人間は自己にしかできないことを、生きている瞬間瞬間に選択して生きている。しかし、その選択は自由な意志のもとに行われる。自由意志のもとに決定した以上、その決定に人間は責任を負わなければならない。それこそが学問を人間が学ぼうとする理由なのである。

もちろん、学問を学び真理に近づこうとしても、全体真実を解明することには絶望をせざるをえない。人間は全体真実が解明できないという不条理のもとで生きていく。しかし、不条理の世界で生きていくけれども、人間は掛け替えのない、たった一人の存在であり、たった一度の人生を歩むが故に、その責任を果たさなければならない。そうした責任を果たすために、人間は学問を学ぶのである。

〈付記〉『スローライフ瓦版』（第441号、2018年11月27日）の私のエッセイの再掲を快く認めて下さり、病の床から3月末日で学長の任が終わる私に、感謝の言葉を述べて下さった堤康代さんに、末尾ながら謝意を表したい。